

Title	Misleading Look : Representations of Gender in Nathaniel Hawthorne's Texts
Author(s)	小久保, 潤子
Citation	大阪大学, 2005, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/46565
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏 名 小久保 潤 子

博士の専攻分野の名称 博士(文学)

学位記番号 第 19784 号

学位授与年月日 平成 17 年 9 月 30 日

学位授与の要件 学位規則第 4 条第 1 項該当

文学研究科英文学専攻

学位論文名 Misleading Look : Representations of Gender in Nathaniel Hawthorne's Texts

(ミスリードする視線 : ナサニエル・ホーソーンテキストにおけるジェンダー表象)

論文審査委員 (主査)

教授 森岡 裕一

(副査)

教授 玉井 暉 助教授 服部 典之 助教授 片瀨 悦久

論文内容の要旨

本論文は、19 世紀のアメリカの小説家ナサニエル・ホーソーンの小説に見られる特質を、gender・sexuality・domesticity に焦点を当て、男性による「誤って導く」〈視線〉、およびその〈視線〉によっていかにジェンダーが再/脱構築されていくかというジェンダー間の〈視線〉のダイナミズムを代表的作品の分析を通して考察したものである。論文は序章、本論 5 章、及び結論から構成されており、全体で英文 220 頁、和文 400 字詰め原稿用紙に換算して 500 枚程度の論文である。

第一章の「痣」論では、「完璧な妻」への強迫観念ゆえ妻の顔の痣を除去する行為にジェンダー間の政治性(夫による暴力的美容整形)を読み取り、痣の「赤い手」の形象に注目して夫と妻の力関係、及び公-私(家庭)の分離の問題を分析し、従来の批評に修正を加えた。

第二章「ウェイクフィールド」論では、テキストの三部構造が語り手のもつ家庭性のイデオロギーを曖昧化する装置であることを明確にするとともに、普遍的意味に解釈されてきた終結部のモラルに家庭性維持の言説、すなわち、「システム(婚姻制度)を逸脱した人間(男性)は永遠に居場所(=家庭)を失ってしまう」というメッセージを読み込んだ。さらに〈視線〉の交錯に焦点を当て、フィクション部が孕む夫と妻の力関係とその転覆の様相を浮き彫りにした。

第三章では、19 世紀アメリカの男性主体が置かれた混乱・矛盾した状況(sexuality の喚起と男らしさの条件である自己抑制の要請)が、『緋文字』における男性主体形成にどう反映しているかを分析した。ディムズデルとチリングワースには、自制・欲望のジレンマから起こる中流男性的不安・矛盾が反映されており、両者はセクシュアリティを公的権力への欲望へと昇華させ、公的な領域で homosocial な関係を結んでいる。だが、そうした関係性は内部に崩壊の種を孕んでいる。自制と欲望で分裂したディムズデルは結局、完全な主体の統合が成しえず、彼と相互依存関係にあるチリングワースも公的領域から消滅させられる。ヘスターは男性による支配構造を内側から修正(脱構築)する要素であるが、テキスト内の homosocial な支配への欲望の執拗さは再び女性達を既成のシステムの中に囲い込む。ここにジェンダー構造を脱構築することに対するテキスト内の(男性の)〈視線〉の強迫観念的な不安を読み取った。

第四章『ブライズデイル』論では、カヴァデイルによる告白を「独身男性の sexuality」という観点から再考し、「中年独身男」の心理的妥協・挫折の「告白」という新解釈を与えた。「独身」という観点から、19世紀文化の heterosexuality への圧力により生じた彼の二つの目論見（肉体労働による masculinity 強化と将来の妻探し）が見えてくる。他者との関係の中で最終的に顕在化してくるのは、彼の sexuality に対する不安・置き換えに他ならない。女性の sexuality に直面できない独身者が heterosexual であることを示すには、「告白」という道具立ては必然だったのである。

第五章『大理石の牧神』論では、作家自身の家庭内の不協和音を考慮した上で、女性表象を分裂させ作家自ら規定したロマンス論を転覆させた原因を分析した。ミリアムは現実の表層下にある闇への洞察力があるため、「ロマンス」の体现者といえる。だが家庭性を求める作家は、家庭性の体现者（ヒルダ）を称揚することで男性主体への脅威（ミリアム）を否定してしまう。作家が家庭性への執着ゆえに物語構造だけでなく、倒錯的にもロマンスのテーマ自体を自ら破綻させてしまった状況が明確になってくる。

ホーソーンは逸脱する女性への不安が増大した晩年、抵抗する女性自身に女性の「生物学的劣性」を語らせる程に女性嫌悪的（視線）を顕著にする。その極端な現われは、最晩年の未完のロマンス『セプティマス・フェルトン』の女性蔑視的（視線）であり、そこでは女性表象は極度に歪められている。しかしながら、本論で明らかにしたように、すでに19世紀において、ジェンダー間の（視線）の交錯のダイナミズムを孕み、（男性中心的）（視線）の構造を内部から突き崩す可能性のある女性達を表象しえたテキスト群は評価に値すると結論できる。

論文審査の結果の要旨

本論文はホーソーンテキストを丁寧に読み解き、かつ、ホーソーン個人の状況と彼を取り巻く時代状況をも視野に入れながら、ジェンダー表象の有り様を探った野心的な論考である。とくに、これまでのフェミニスト批評が軽視していた男性登場人物のジェンダー観を女性登場人物との視線の交錯という観点から詳述した点は新鮮な切り口で、ホーソーン研究への貢献度が高い。また、domesticity というキーワードによる分析は19世紀アメリカ文化論としても十分に通用するものと思われる。

ただし、本論文において問題がないわけではない。章構成のあり方、視線をめぐる議論の不透明さ、ジェンダー論に関する説明が不足していると思われる点、あるいは、テキスト分析と、文化的、伝記的コンテキストの分析との折り合いのつけ方等に改善の余地があるように思われる。しかし、それらの点は望蜀のごときものであって、本論文の本質的な価値を損なうものではない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。